

## 紹介

小野信爾著、宇野田尚哉・西川祐子  
・西山伸・小野和子・小野潤子編

### 『京大生・小野君の』

#### 占領期獄中日記

朝鮮戦争のさなかの一九五一年二月、一人の「京大生」が逮捕された。名は小野信爾といい、後に中国近代史を専門とする歴史学者となった人物である。本書は小野が獄中でしたためた日記を翻刻・出版したものである。

小野は一九三〇年大分県に生まれ、竹田中学校を経て四九年に京都大学文学部に入學し、翌年一月に日本共産党に入党した。その僅か四か月後、党地区委員会の指示で朝鮮戦争反対のピラを撒いた際、占領目的阻害行為処罰令により逮捕され、GHQの軍政法廷で重労働三年、罰金一〇〇〇ドルの判決を受けた（後に重労働二年、罰金なしに減刑）。

本書は大きく三部からなり、まず小野自身の回想と、西川氏による解説が掲載され、

その後に「翻刻編」と「解説編」が続く。読者は最初にこうした回想や解説に目を通すことで、事件についての事実関係や日記の特徴、史料の価値を予め理解できる。

「翻刻編」では五一年八月七日から、サンフランシスコ講和条約発効に伴う恩赦により釈放された翌年四月二八日までの日記が翻刻され、本書の核をなしている。小野が日記を書き始めたきっかけは、当時京都大学文学部長であった宮崎市定の厚意により筆記具を入手したことであった。

日記の記述には社会主義思想の影響が濃厚だが、米国のもと再軍備を進める日本政府を「売国」と非難し、「平和」を希求する小野の言葉は、中学三年で敗戦を迎えた青年の率直な感情を反映していると思われる。戦前・戦中に獄につながれた河上肇や戸坂潤、三木清ら「先人」に思いを馳せつつ、革命への使命感に駆られる姿は、当時の学生の思想を理解する上で興味深い。

また翻刻に付された註には、日記筆者の小野自身や存命する他の元囚人への聞き調査の成果が反映され、本書の内容を一層豊かなものになっている。これにより、読者は日記本文だけでは読み取れない事実関係や

人物関係を理解でき、西川氏が述べるように、「平板になりやすい日記文にさらなる奥行と時間の層」が「与え」られる（二六頁）。

「解説編」では、編者の西山、宇野田、小野潤子の各氏がそれぞれ占領期の京都大学、東アジア情勢、そして日本の軍政法廷という観点から解説を加える。これらの解説により、小野という一個人の日記が、より広く現代史の中に位置づけられる。

小野が獄中で過ごした九か月は、西側陣営との単独講和や日米安保、日本の再軍備などが大きな政治問題となり、戦後日本の在り方が決定された時代であった。この激変期を、青年小野はいかに認識し、いかに生きたのか。時を経て、当時を知る人々が姿を消しつつある今日、日記という貴重な一次史料が関係者の回想や証言と共に翻刻・出版される意義は大きい。近年進展しつつある日本の占領期についての実証研究に大いに寄与するであろう。お勧めしたい。

（A5判 三一六頁 二〇一八年二月）

京都大学学術出版会 税別三八〇〇円

（立花孝裕 京都大学大学院文学研究科

修士課程）